

平成二十二年三月一日発行（毎月一回十日発行） 通巻八四二号
昭和二十五年四月二日第三種郵便物認可

火星

平成二十二年三月号



七曜抄 (六)

山尾玉藻

くれなるの枯野へ喪主の一礼す

蕪畑の中とほりきし地獄絵図

まみどりの井戸の竹簀や雪くるか

寒蜆売りが夕晴れ置きゆきし

きらきらと峽ぼこり降る冬菜畑

節分や森のとば口濡れゐたる

むらさきに伊吹嶺昏るる残り鴨

東風吹くやぶぶ漬屋より僧ひとり

荒東風やふるまひ酒をこぼし合ひ

風船の入りゆく手塚治虫館

平成二十一年度火星賞作品自選二十句

山本耀子

雪解川対岸は顔照らされて
遣り水のたどりつきたる菖蒲の芽
塵となり掃く花びらの逃げやすし
爪跡の樺の高み雪解風
砂平らひさかきのひさかき花零れけり
青梅やにはとりの影伏せ籠に
屋近く汚れてゐたる烏賊釣火
鉾立や枕当てある心柱



念入れて母梳きくれし終戦日
墓鳴くや母の生家の太柱
藻畳を潜り抜けたるかるの子よ
角切りしこぐちに滲むものを見し
施餓鬼寺粒のきはだつ握り飯
蔓たぐる糸瓜の腹を引き擦つて
白に水張つてあるなり秋収
薪積む嵩に綿虫増ゆるかな
臥す母が臘梅の香に首もたぐ
煤逃げの媪に夫の聴診器
初声や京ちりめんのおざぶにも
祓はれて福笹重くなりけり

太白星

柳生千枝子

頬赤く入り来て笑ふ聖夜の子
聖歌いま高調ひとみ輝かせ
聖夜劇ヨセフとマリア婚約中
速歩して枯木並列目のすみに
霜の声ひと日を無為に過ぎしたる
パンドラの箱煤掃の抽出しは
霜のこゑ海深閑と満ちてをり

杉浦典子

綿虫や救命ボート乾きをり
枯菊を焚き空の端をにごしたる

冬鷺の脚涸川の日を搔けり
綿虫や矢印に沿ひ水に沿ひ
灯ともして船帰りくるクリスマス
クリスマス練習船の灯ともして
毛糸編む縦の木に雨降りつづき

浜口高子

風音の美濃も奥なる干菜の湯
極月の財布に探す一円玉
鍋じめりせる忘年の下足札
鳩の笛夫のものなど羽織らむか
ドラム缶積みし向うのクリスマス
酒くさき人と行き合ふ寒鼻
枯蓮を巡りて蹠ぬくとかかり

火星作品

山尾玉藻選

手鏡に夫うつりぬる風邪心地

大和郡山城

孝子

エプロンに鱗とびつく一葉忌

愛宕山の枯へ大鯉かかげけり

首すぢに人の息ある年の市

とつくりのセーターひと言申しけり

右岸左岸と別れてそれも浮寝鴨

宝塚山本耀子

好きことは声に出しけり茶花垣

武庫川に灯の流れ行く去年今年

ふくろふや父を越えたるもの一つ

谷町に大事ありけり着ぶくれて

時雨きて時雨かさなる粟田口

神戸深澤鱧

クリスマス盲導犬に道ゆづり

羽子板市あやしき路地のなほしづか

仰山の巢箱吹か
る枯木山
水鳥の流されも
して小晦日
大風の夜の梟を
思ひをり
合せ鏡に寒さう
な空のあり
珈琲の出前届き
ぬ飾売
猪狩のこ糸川の
辺へ下りゆけ
り
下りてきし山が
まつ黒干菜汁
雉鍋の湯気のみ
かうの枯野か
な
大根焚小さき踏
切渡りきし
銀杏散る坂の中
途の古本屋
霜の夜のコンピ
ナートの煙か
な
岩礁の飛沫に立
つる冬の虹
工事場に楯の燻
る冬紅葉
十二月八日の山
を灯の過る
椎の木の枯れを
急ぎ立てけら
つつき
故里へ詫びに行
けよと雪螢
大鐘の音枯山に
ぶつつけし

明石戸栗末廣

小林成子

宝塚蘭定かず子

選のあとに

山尾 玉藻

手鏡に夫うつりゐる風邪心地 城 孝子

「風邪心地」の時は気分が張りが失せ、ナーバスになり勝ちである。使っていた「手鏡」にご主人の姿が偶然に映り、作者の胸中にふと翳りが生じた。手鏡のご主人の姿が、作者に少々の風邪ぐらいでは休めない主婦業を思い出させたのだろう。主婦ならではの感覚で「風邪心地」を捉えている。

ふくろふや父を越えたるもの一つ 山本 耀子

作者の父上は厳格な方だったとお聞きするが、父上ご自身も立派な生きざまを作者に示されたことだろう。掲句、陰翳や屈折感が漂う季語「梟」をやで切っており、そこにかんがひの心象的ウエイトが感じられる。中七下五で自分を納得させつつ、作者の胸中はまた上五の「ふくろふや」へと自ずと回帰している。父上も以前火星に在籍されていた俳人であり、この度の年度賞受賞で作者は確かに父上を一つ越えられた。

時雨きて時雨かさなる粟田口 深澤 鱻

「粟田口」は京都市東山区にある地で、東海道における京のどば口である。時雨が止むか止まない内にまた別の時雨が

来たのだろう。「時雨きて時雨かさなる」はなかなか手だれた表現である。「京時雨」と膾炙されるほど京都は時雨の多い地で、またどの地に在つてもその景は大変美しい。「粟田口」からいよいよよその京都である。

下りてきし山がまつ黒干菜汁 蘭定かず子

昼の間に山越えをしてきた作者は、麓の宿の夕食に出された心づくしの「干菜汁」を啜っているであろう。「山がまつ黒」とはふと口をつけて出た作者の驚きであり、その驚きから昼間辿った山中は明るく暖かだったことが察せられる。「干菜汁」から伝わるほっこり感が、「まつ黒」な山の夜の寒気を十分に想起させる。

雉鍋の湯気のむかうの枯野かな 小林 成子

私は「雉鍋」を食したことはないが、どこか気後れしながら囲む鍋もののように思える。「雉」と言えば、どうしてもあの極彩色の顔や毅然とした眼差しを思い浮かべるからだろう。作者が鍋をつつきながら「湯気のむかうの枯野」を意識するのも、そんなちよつとしたころの弱みの所為であろう。もしかすると、作者は雉が飛び立つあわたたしい羽音を聞きとめ、あわてて窓外の枯野に眼を遣ったのかも知れない。無論空耳であったのだが。

(以下略)

恒星圈

波田美智子

行き過ぎて冬至南瓜を煮る匂
裸木に大根を干す頃となり
遠くまで尾花枯れをり霜日和
櫻枯れ一番星の光りをり
同病の人達優し室の花

戸田 春月

廣畑 忠明

綿虫に人の高さのある日和
百貨店サンタクロースの勢揃ひ
暗転に星の子が泣く聖夜劇
葉牡丹を抱いて乗り込むエレベーター
鴨ねむり一つ点らぬ池畔燈

爛熱し迷路のやうな路地の奥
誓子居の障子に映る機の影
日の中に赤き木の実や青畝の忌
南座にまねきの上る初時雨
吊革に女の手袋伸びて来し

野澤 あき

深澤 鱒

上新田文化財団小学校
オルガンの椅子すりきれし寒さかな
學の字のむかしの瓦山眠る
アルバムの小学生の着ぶくるる
冬木の芽百年前の椅子机
ちやんちやんこ卒業生は大地主

陸橋や動物園の十二月
枇杷の花このうら英語教えます
ことごとく太郎次郎の聖夜とす
次郎めに鼻いらはるる初湯かな
次郎まづ太郎做うて去年今年